

語りの中の木戸孝允

堀口 修

目次

- 一 古典的な談話録
- 二 兼重慎一の談話録
- 三 坂下門外の変と内田万之助
- 四 内田万之助一件
- 五 内田自刃後の桂小五郎

キーワード

逃げの小五郎 『松菊公逸話』 兼重慎一君談話 安藤
要撃 武士の情け

一 古典的な談話録

現在、維新の三傑のひとりである木戸孝允（桂小五郎）^①（一八三三—一八七七）に宛てた書翰を纏めた『木戸孝允関係文書』が東京大学出版会から刊行中で、筆者はこの刊行に参加させていただき数多くの木戸宛書翰を読む機会に恵まれた。諸氏からの書翰の内容は実にバラエティーに富み、政治問題はいうに及ばず発信者の身辺雑務について書かれているものもある。そもそも木戸は、聞き上手といわれている。このことから筆者などは、木戸は相談しやすい人物であったと勝手に納得してしまう。

それはそれとして、そもそも木戸とはどのような人物なのか、ということがひどく気になりはじめた。彼は、よく「逃げの小五郎」と言われあまり芳しくない人物評をうけている面もあるが、実際はどうなのか。

そこでまずは木戸を知る人物が彼をどのように語っているのかを調べてみた。そこで手にしたのが昭和一〇年（一九三五年）に刊行された妻木忠太編『史実参照木戸松菊公逸話』（有朋堂書店。以下、『松菊公逸話』とする）である。妻木は木戸孝允の正伝である『松菊木戸公伝』上・下（明治書院、一九二七年）をはじめ、『木戸孝允日記』（全三巻。日本史籍協会、一九三二年）、『木戸孝允文書』（全八巻。日本史籍協会、一九二九年～三一年）なども手がけた人物である。その妻木が編集した『松菊公逸話』であるので木戸がどのように語られたかを知る手掛かりとして申し分ない。『松菊公逸話』で木戸を語る人物の名前をあげると、勝海舟、板垣退助（土佐藩）、大隈重信（佐賀藩）、田中光顕（土佐藩・宮内大臣）、土方久元（土佐藩・宮内大臣）、大倉喜八郎、渋沢栄一、久米邦武など、実に錚々たる人物達である。談話の時期は一部を除き、ほぼ大正六年から同八年（一九一七年～一九年）に集中している。ここでは木戸が関わったいろいろな政治問題を題材として彼が語られており、いずれの談話も興味が尽きない。^②これは昭和六〇

年（村田書店）、平成二十七年（マツノ書店）に復刻されているところからしてかなり多くの人々に愛読されているようである。

二 兼重慎一の談話録

しかし、木戸が語られているものはほかにもある。例えば宮内庁書陵部図書寮文庫に所蔵されている「木戸家文書」中の「木戸孝允二関スル諸士談話速記録 全」（函架番号／二七三一—一〇四。以下、「談話速記録」とする）がそれである。これは刊行されていないのであまり世に知られていない。その「談話速記録」は、①「明治廿七年七月十日故木戸孝允君逸事談 兼重慎一君談話」（「毛利家編輯所」罫紙・片面一〇行使用）、②「明治二十九年九月二十六日史談速記 渡辺昇君談話」^③（無名片面七行罫紙使用）、③「明治廿九年十月廿六日 故木戸孝允君事蹟談話速記」^④（片面一行二四字・九行原稿用紙使用）の三つからなる。談話がなされた場所はいずれも侯爵木戸孝正の邸で、速記者は西島剛太郎である。

その「談話速記録」のうち、兼重慎一（一八一七—一八九七）の談話は「毛利家編輯所」罫紙を用いて記され、またその内容が毛利敬親（忠正公）の家臣達が語っているところから、これらの談話は毛利敬親の事蹟を編纂する作業と何らかの形で繋がっていたものと推測する。

実は、毛利家では毛利敬親が明治四年に逝去すると、翌年からその事蹟を編纂する作業を開始する。ここでその経緯を詳しく述べる余裕はないが、あれこれ問題があり編纂は途中から伊藤博文の娘婿で、長州藩出身ではない末松謙澄が責任者となった。その上、最終的には末松個人の手で編纂されるという複雑な経緯を辿った。そして遂に『防長回天史』として結実し、末松急逝の半年後の大正一〇年三月、『防長回天史』（修訂版）全一二巻が一気に刊行された。^⑤

全六、七八〇頁にも及ぶ大冊である。後述するように「談話速記録」は、明治二七年と同二九年の時のもので、末松が総裁に就任したのが明治三〇年とされるからそれよりは数年前のものである。

さきの『松菊公逸話』は、正伝を編纂する際、木戸の交友者四七名から直接、間接に談話聴取したものである。木戸が逝去したのが明治一〇年であるからかなり時間が経っている。それに比して「談話速記録」は、明治二七年と同二九年のものであるから木戸が亡くなってからほぼ二〇年経った時の談話であり、彼の逝去を起点にすると『松菊公逸話』よりはかなり近い時期のものである。尤も時期の遠近が談話内容の質を左右するとは限らないが。

三 坂下門外の変と内田万之助

「談話速記録」のうち、①の「明治廿七年七月十日 故木戸孝允君逸事談 兼重慎一君談話」の兼重なる人物の経歴を記すと以下のようなものとなる。彼は萩藩校・明倫館で学び、村田清風の知遇を得て、天保一一（一八四〇）年には仕官して右筆座の筆者役を務める。嘉永六（一八五三）年のペリー来航後、相模警衛、兵庫警衛にあたる。文久三（一八六三）年の八月の政変後、藩主訴冤のために尽力するが、元治元（一八六四）年の禁門の変後、恭順派が主流の萩藩政府により譴責される。慶応元年、藩論回復により国防方に参画し、大村益次郎と兵制改革を担当する。その後、国政に参画するが、明治維新後は毛利家編輯所において藩史の編纂に専念する。

その兼重の談話であるが、最初に「記録に在りますものハ記録に拠て調べますれハ分ります、記録に無い様な事で私の記憶中に存して居る事を申し上げます」との語りからはじまり大いに期待を抱かせる。

さて、それはそれとして兼重の談話は、内田万之助、破約攘夷、薩長同盟、大津唯雪の四つの話からなる。これらの中で筆者が最も興味を引いたのは内田万之助の話である。この内田の話は決して目新しいものではない。例えば

『松菊木戸公伝』上や『伊藤博文伝』上巻（春畝公追頌会、一九四〇年）、『概観維新史』（維新史料編纂事務局、一九四〇年）などでも書き記されている。話はこうである。文久二年一月、公武合体を進める中心人物のひとりとされる老中安藤信正が坂下門外で水戸藩浪士・平山兵介ら六名に要撃されるという事件が起きた。世にいう坂下門外の変である。『松菊木戸公伝』上で水戸浪士・川辺左治衛門⁶としている内田万之助は、要撃に加わるはずであったが機会を失して要撃に加わることができなかったという。この理由がどこまで本当かどうかは別として、その内田が桜田の長州藩邸に木戸孝允、すなわち桂小五郎の許を訪ねてきたのである。

そもそも万延元（一八六〇）年七月、水戸藩の西丸帯刀らと長州藩の桂小五郎らは連帯して行動する事を約した（水長の盟約などと称される）。これにより安藤要撃等が計画されたが、藩内事情のため参加が難しくなった長州側は計画の延期を提案したが、水戸側は長州の後援なしに実行したのである。そうしたことがあったからであろう内田は桂を訪ねた。この時の模様を『松菊木戸公伝』上では淡々とした中にも要点を押さえた簡潔な文章で書き記している。その主要な部分を左に引用してみよう。

是時兵介（安藤を要撃した平山兵介―引用者）等の同志に水戸藩士川辺佐治衛門なるものあり、姓名を変じて内田万之助と称す、事を挙ぐるの日、誓約の如く坂下門外に赴きしが、機会を失して要撃に参加すること能はず、万之助素より公の声望高きを知る、依りて以て為らく、懷中の書を公に授けて安藤要撃の主意を明にし、且つ之に後事を嘱して死せんのみと、其書は世に所謂斬奸状是れなり、万之助既に意を決し、公に面して情実を吐露せんとし、坂下門外を去りて直に長藩桜田邸の有備館に抵る、（中略）公（桂―引用者）未だ曾て万之助に面識なかりしも、兵介等が要撃の計画あるは夙に之を知り、且つ是日其拳に出でんとするは兵介の予め報ずる所なり、さ

れば万之助の来るや、公は急に麻布の長藩邸に趣きて当路に其状を告げ、且つ凝議する所ありたり、万之助は公の在らざるを聞き、邸員の誘導に従ひて講堂に入り、姑く公の帰るを待つ、日暮に及びて公帰り来り、始めて之に面接す、万之助乃ち懷にせる斬奸状を出だして公に托し、且つ其志を告げて後事を囑す、公之を慰諭し酒食を侑めて互に談話せしが、万之助公の坐を去りしを窺ひ、一詩を高吟して遂に自刃せり。(二〇六―二〇七頁)

四 記憶の中の内田万之助一件

では、兼重はこの時のことをどのように語っているのであろうか。以下、確認してみよう。桂との面会を求める内田に對して、長州側はまずは事態の把握に努めるが、幕府とやっかいなことになることは避けたいため、早く立ち去つてほしいというのが本音だったようである。しかし内田はどうしても桂に会いたいという。このため藩邸側は慎重な対応を心懸け、兼重が麻布・龍土の藩邸から桜田藩邸へ駆けつけ、奥平数馬と共に対応方にあたつた。以後、兼重は常に陰で指図することになる。まず彼等は桂をすぐには出さず、留守である旨を伝える。

これに對し内田は安藤を要撃した一味の同志であり、少しく機会に後れ残念千万であるが、桂は高名な人物なのでお目にかかり申し上げたいことがあるという。以後、桜田藩邸側では内田を有備館でもてなすが、彼との間で緊迫感溢れるやり取りがなされる。ここで一旦、桂が内田に会い委細を承知した後、桂は麻布の藩邸に赴き内田の処置について相談しようである。その結果、麻布の長州藩首脳の方は割腹させるのが都合がよいとの判断であつた。だが桂は窮鳥懷に入るとの考えで内田を見捨てる訳にはいかぬ、自分に御暇をいただければ兩人で駆け落ちしたいと願つたという。

しかし、大方の考えは幕府との関係からそれではできず、内田にとつても「同志への義も立たず、面目も破つて仕舞

ふ事であるから、寧ろ此処で割腹させた方が彼の為にも宜からると云ふ事」となる。そこで奥平に内田が割腹する気があるかを問わせたところ、本人も決心しているとのこと。それならばと酒席を用意して、始終奥平が相手をする。また毛利家を頼り、桂を頼ってきた者なので、死骸は「此方に申受けて立派に跡の始末をして遣るか彼に對してせめて宜からうからと云ふ事で、其仕度をさせて置」いたという。

また、兼重らは国許への遺書、家族への送金についての意志を問うたところ、内田はいずれも素直に受け入れ、送金の金額については慎ましく五両ほど配慮してほしいという。五両ではあまり少ないので再度問うたところ、やはり五両でよいという。そして遺書が書かれ、その中に「何分平素の遺志を継いで国家の為に尽す様」「金五両差送る」という様な文章で、兼重らが読んだところ「誠に之ハ楠正成の庄五郎に送った文と同様なものであるといふて賞歎」する。さて内田は直ちに割腹するかというところではなく、また酒を呑んでワイワイと話をする。そうこうしているうちに日が暮れてくる。そこで内田をひとりにして様子を見ていたところ、ついに「何かグツと酒を呑んで一言発した。『愉快』と云ふた様であつた。直く刀を抜いて咽喉に突込んでウツブシに俯しました。其限であつた」という。

なお、さきに触れたように『松菊木戸公伝』上では桂の面会、斬奸状⁷、慰諭、酒食談話、一詩高吟、自刃という流れで、まったくあつさりとしたものである。それに比べると、「談話速記録」では桂、兼重、奥平がそれぞれ武士内田の身の処し方を真正面に据えて対応している。特に桂の共に身を隠す云々には驚かされる。本当に桂はそんなことを言ったのであろうか。『伊藤博文伝』（上巻）では桂が内田に「国のために命を棄つべき時は、今後も必ず来らん、暫らくいづれかへ身を隠して時機を待たれよ、旅費は自分に於て用立て申すべしと懇切に諭」（四〇頁）したという記述がある。この方が妥当のように思えてならない。だがどちらが本当なのであろうか。ただただ唸るだけである。それにつけても「談話速記録」で語られる桂、兼重、奥平の立ち居振る舞いの中に武士の情けと言われるを感じて

しまうのは筆者だけであろうか。また国許への送金の遣り取りに見られる心遣いに心が揺さぶられる。もう芝居の世界でしか語られない遙か彼方の時代の武士の情けなるものが、こうした史料の中から立ち上がってくることに歴史を学ぶ醍醐味を感じるのであるが、他方、はたと感じたことがある。それは歴史史料を読むことの難しさである。日頃、歴史と史料学の知識を駆使して史料を読み込んでいる気にはなっているが、史料に関わる人物達の意識と精神をどれほど分かっているのだろうか、忸怩たる思いである。情けという言葉に同情の意味合いを多く含んで理解しているのではないか。どうもそういう理解だけではだめなようである。いやそもそも幕末の武士がどういう精神を持っていた人間なのか、そのこと自体がよくわかっていないのではないか、との思いに駆られてしまう。歴史を学ぶことのむずかしさを実感することしきりである。

五 内田自刃後の桂小五郎

さて、最後に内田が自刃した後のことを「談話速記録」、『松菊木戸公伝』、『伊藤博文伝』から確認してみたい。長州藩側では内田の自刃後、直ちに、松平大膳大夫内小幡彦七の名を以て事情を書き記した書面を幕府へ提出し、死骸は当方で処置したい旨を申し立てた。ところが幕吏はそれを認めず内田の遺骸を町奉行役宅へ移した上、桂小五郎、伊藤俊輔（博文）に尋ねたいことがあるので町奉行所に出頭せよと命じる。幕吏は内田の自刃に関して両名に疑義を有していた。長州藩側は桂を出さないと一年でも二年でも匿して置かないといけないが、今日大事な人物である小五郎を匿すよりは出した方がよいとの判断となった。これに有備館の書生連中は激しく抗して反論したが、結局、小五郎に伊藤俊輔が若党という名義で付き添うことで話は落ち着いた。一度出頭すれば済むと思っていたが、その後小五郎は二三度出頭させられたという。兼重がいうには、その際、幕府の役人に手を廻して種々内願したり、どの役人に

手を打つのが効果的なのかを探ったり、はたまた切餅即ち賄賂を使ったりと四苦八苦したという。しかし最終的には長井雅楽の幕閣への働きかけもあり、桂が水戸へ遣わされることになった。しかし結局のところ、桂は水戸へは行かず、桂と伊藤が譴責を受けて一件落着となった。

以上が内田万之助一件であるが、この話から伝わるのは桂を取りまく人々が強い意志で彼を支えている姿である。また桂は内田のような藩外の人士からも一目置かれている。その木戸も池田屋事件以降、「逃げの小五郎」と言われ長州藩内の評価はガタ落ちとなる。だが、薩長同盟を成立に導いたことで評価は再び高まっていく。以後の活躍は、よく知られるところである。そして木戸は、幕末から維新という激動する歴史の中に身を置きながら、新しい日本をつくるために格闘する。しかし、現実の政治は厳しい。「理想」を説く木戸の意見は、書生論と揶揄されることしばしばである。

その木戸は、維新の途上で落命した人達へ惜しめない同情、配慮を巡らしている。彼は人を引きつけてはなさない魅力溢れる人物であったようである。その木戸は、いま京都の霊山護国神社内に坂本龍馬達と共に祀られている。永遠の青年、木戸孝允。興味が尽きない人物である。

注

- (1) 幕末期の木戸孝允の動静に触れる時は桂小五郎と記す。
- (2) 『松菊公逸話』の談話記録原本は、現在、明治大学図書館に所蔵されている。
- (3) これは渡辺昇を中心として杉孫七郎、木戸孝正、作間克三郎、野村靖が座談を行っている。
- (4) これは穴戸磯、品川弥二郎、木戸孝正、作間克三郎、山尾庸三が座談を行っている。
- (5) なお末松の『防長回天史』を嫌悪する旧家臣の間では、毛利家編輯所で兼重慎一の部下であった中原邦平が編纂した『訂正

補修忠正公勤王事蹟」(防長史談会、一九一二年)を評価したという。

(6)

『概観維新史』では「川辺左次衛門」、『伊藤博文伝』上巻では「川辺佐治右衛門」とする。

(7)

『概観維新史』によると、要撃した人物はみなこれを所持しており、幕府がそれを没収してその流布を阻んだが、長州藩に伝わったものが流布し当時の志士を鼓舞したという。